

二〇二〇年一月二三日

小狸の眠る小春の休耕田
粧ひし山の麓にワイナリー
小春日やピエロの招くカフェテラス
御手洗の龍の鱗の冬日影
マスクして目元美人の朝市女

二〇二〇年一月二二日

庭の柚子削ぎて一碗香を愛づる
園児らの大縄飛のよく続く
堂縁に座して長居や照紅葉
ロープウェイ秋から冬へ昇り行く

二〇二〇年一月二一日

境内にとよもす太鼓神送り
紅葉寺案内の沙彌は青つむり
新米の炊きたてまづは塩むすび
下校児の寄り道寺の落ち葉焚き

二〇二〇年一月一〇日

おしゃべりの口元へこむマスクかな
汽水湖に雲引き寄せて秋夕焼
煉瓦より赤き照葉や教会堂
天辺に鴉の巢抱く木守柿

二〇二〇年一月九日

露座仏へ打敷きのごと散りもみぢ
五彩なす南京櫛の並木道

三刀

せいじ

みづき

たか子

なつき

もとこ

せいじ

たか子

たか子

みきお

たか子

凡士

智恵子

なつき

もとこ

むべ

明日香

菜々

はく子

初霜の畦にたたらの鴉かな

北風に晒して白き膝小僧

高欄に木の葉時雨の降り止まず

里の柚子くつくつ煮詰む夜長かな

二〇二〇年一月八日

鈍色の移築の門や乳鋌冷ゆ
小春日のドア開放す美容室
草履履き慣らして待てり七五三
寒潮を照らして暗し常夜灯
知らぬ児のバイバイ小春日和かな

たなびける畑の煙や紅葉山

紅葉山連なる先は伯耆富士

水平線と紛ふ一刷け秋の雲

七五三掛けたる絵馬の鏡文字

二〇二〇年一月七日

真青なる秋天分けて飛行雲

誕生日孫より届くちゃんちゃんこ

冬帽の色で呼ばれる立ち飲み屋

競ふごとく溪へきり揉む落葉かな

終点はどんぐりの樹よ縄電車

久闊を叙すや母校の文化祭
封を切る珈琲の香や今朝の冬

素秀

素秀

明日香

むべ

明日香

満天

なつき

素秀

音吉

ぽんこ

もとこ

やよい

なつき

やよい

はく子

潤道

智恵子

たか子

せいじ

凡士

毎日句会みる選・二〇二〇年一月一五日